

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	李 智賢 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	要 旨
論文題目	「疎外された者」と「隣人愛」 -1937年～1948年の作品にみる太宰治-	<p>この論文は、聖書のなかに記されている「隣人愛」を表わしている「汝己を愛するが如く隣人を愛せよ」という言葉を中心にして、第二次大戦時から戦後にかけて、日本におけるキリスト教的な表現の一つの例として、太宰治の作品を手がかりにして、そこでの「隣人愛」について、「疎外された者」あるいは被疎外者という概念を設定することで、聖書のテキストの概念と作品中の表現との差異を検証し、作品中の疎外された人物について考察したものである。分析の対象は、太宰が聖書に接し、「隣人」という言葉が出現する時期である、1937年から1948年までの作品である。これらの作品の中で、疎外されている者は、社会や家庭や世の中の人々から疎外されている人物であり、それらを「隣人愛」の視点から考察することで、そこに人間の本質的な部分である「愛」への指向性があることを見だし、そうした愛のかたちが、聖書のテキストからはやや異なるものの、被疎外者へ救いの手を差しよばそうとした作者自身の内面の問題への手がかりとなることを示した。『家庭の幸福』に記された家庭は、太宰の語る家庭のエゴイズムの描写であり、そこに疎外されて不幸を感じているかもしれない女性の存在に気づかない主人公がいること、また『雪の夜の話』における、灯台守の家庭と難破した水夫の関係も同様であり、幸福な家庭がある一方で、そこから疎外された水夫がいて、そうした被疎外者が作者自身であると捉える。本論では、そこに被疎外者たちに対する親和感を見だし、太宰という作者が、キリスト教的な神の前での「義」である「隣人愛」を実践し、格闘した、と捉えている。本論文は、反秩序のイメージを持たれていた太宰の文学を、人間の本質的な部分である「愛」を求めた文学として読み直したことに大きな意義がある、としている。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	教授 棚橋 訓	
	教授 高島 元洋	
	教授 加賀美 常美代	
	東京大学大学院総合文化研究科 教授 菅原 克也	

